

# 特集「東洋思想と現代」

Feature: Eastern Thought and the Present Day

日中国交正常化三十周年の佳節を迎えた二〇〇二年、東洋哲学研究所ではこの意義を留めるため、池田大作創価学会名誉会長と、中国随一のインド学・仏教学の権威である季羨林北京大学教授、法華経写本研究の第一人者である蒋忠新中国社会科学院教授による対談集、「東洋の智慧を語る」を発行した（本誌の第三十九巻第二号から第四十一巻第一号に連載された内容に序章を加筆）。

同書の出版を記念して、当研究所では、「東洋思想と現代」とのテーマで、昨年十月から十二月にかけて連続公開講演会を開催した。

地球生態系の破壊、人間精神の荒廃、経済格差の拡大、テロリズムの頻発、核拡散、民族・宗教紛争など、人類の克服すべき課題が山積する現代にあって、仏教、儒教、道教に代表される東洋思想がいかなる寄与をなし得るか、さまざまな角度から考察する講演会となった。

■連続公開講演会より

## 東洋思想と現代

梶山雄一

はじめに

一九七二年九月二十九日、日中共同声明が調印されて日中国交正常化が成りましたが、二〇〇二年はその三十周年にあたります。中国の著名な仏教学者である季羨林教授とその弟子にあたる法華経研究者・蒋忠新教授は、創価学会名誉会長池田大作先生をまじえて鼎談を行い、その成果は二〇〇〇年から二〇〇二年にかけて『東洋学術研究』に連載されておりましたが、このほど『東洋の智慧を語る』と題する書物として出版

「分断」から「融合」へ、「破壊」から「創造」へと時代のベクトルを転換すべき時を迎えているいま、東洋思想が果たす役割について考察することには、大きな意義があるろう。

今号の特集として、京都大学名誉教授の梶山雄一氏（『東洋思想と現代』）、創価大学教授の菅野博史氏（『法華経の現代的意義』）、愛媛大学教授の邢東風氏（『中国思想と現代』）、北京大学教授の賈惠萱氏（『中日文化の比較研究』）による全四回の講演内容に発表者が加筆し、掲載した。

されました。その出版を記念して、日中の学者による講演会が東京および大阪で開かれることになりましたが、その第一回が本日の講演です。

この講演は、上に御紹介しました書物『東洋の智慧を語る』のなかに取り上げられました、東洋文化の基本的性格としての「天人合一」「依正不二」という東洋の智慧を出発点といたします。天とは、季羨林先生のご解説によりますと大自然のことで、天人合一とは、人間と大自然とが一体であるという思想が東洋文化の基礎をなしている、ということですが、「依正不二」とは、

正報つまり人間を初めとする衆生と、依報つまり環境世界とが、二つに分けられることなく一体をなしているという思想で、仏教で教えられてきました。私の講演の題は「東洋思想と現代」となっておりますが、一時間ほどの短時間でこのような大問題のすべてにわたることは不可能でありますので、集中的に話を進めるために、西洋文化の基底をなしている人間中心主義と、東洋文化、なかでも仏教思想の基底である人間とその環境世界との一体性ということに焦点をしばって、お話し申し上げたいと思います。

—

ユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教という三つの世界宗教は、現代世界においては差別、迫害、戦争やテロリズムなどによってたがい争ってまいりましたが、「アブラハムの宗教」などと一括されますように、もとは中東において一神教として発生した根を同じくする宗教でありました。一神教といえますのは、沙漠において、世界を創造した唯一なる神を崇拜する

存在したことは、中村元先生の指摘されているとおりです。『スッタニパータ』という仏教最古の原始經典のなかに、「世界を空なりと見よ、そうすれば死を乗り越えることができるであろう」という言葉があることから、それは明らかです。人の心を離れて世界の認識はなりたないという考え方は、原始仏教以来のものでした。

日蓮大聖人は、「瞋るは地獄・貪るは餓鬼・痴（おろか）は畜生・諂曲なるは修羅・喜ぶは天・平らかなるは人なり」（観心本尊抄）と語っているではありませんか。人に靈魂はない、という無我の説は、同時にあらゆるものに実体はない、ということでもあります。「我」（アートマン）というのは、靈魂とともに、自立的で、変化せず、永続する実体という意味でもあるからです。だから、仏教は初めからすべてのものは空である、その意味で、人と自然環境（大自然）とは一体のものである、と語っていたのです。この点で仏教の思想は、唯一なる神の像に似せて造られた人間が植物・動物・天地を支配するという、キリスト教的な考え方を否定し

宗教です。『旧約聖書』の「創世記」によりますと、世界で唯一の神が天と地を造り、草木、月と太陽、水中の魚類と空中の鳥類、地上の家畜と昆虫と獣を造り、最後に、人を神の像のとおり造り、かれらに海の魚と天の鳥と、家畜と獣と、すべての地の上に這うものとを支配させた、と書いてあります。こうして人は、神によって不滅の靈魂を吹き込まれているのです。

池田名誉会長は上記の書物のなかで、『旧約聖書』のこの部分を引用しておられます。ヒューマニズムという言葉はいろいろに理解されているようですが、欧米の人間中心主義というものは、旧約に始まってキリスト教にまで伝わった、人間は神にかたどって造られ、すべての動物・植物・環境世界を支配するように造られた、という考え方を元にしてゐるわけです。

二

大乘仏教において強調される、あらゆるものは空である、いいかえれば、自立的で、変化せず、永続する実体を離れている、という思想はすでに原始仏教にも

ていたのです。

三

宗教学でよくいわれるように、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教というような沙漠で成立した一神教と、森林地帯で、いいかえれば、インドを始めアジア全体にあたる地域で成立した多神教とは、基本的に性格を異にしています。一神教世界では、神に直接にかたどられた人間とそれに支配される自然環境とを二つに分けますが、仏教を含む多神教では人間とその環境とを一体のものと見ています。一神教では一つのものを二つに分けるが、多神教では二つのものを一つにする、といわれる所以です。

四

仏教の基本的な教義に「五蘊説」というのがありません。これは、人間の身心だけでなく、すべてのものを、物質的存在・感覚・表象・意欲・識別作用という五要素に分けるものです。物質的存在は術語で「色」とい

いますが、色とはわれわれのいう「いろ」（顕色）と「かたち」（形色）の二つをさし、要するに物質的なものをいいます。感覚は術語では「受」すなわち感受です。たとえば机の感覚は机という対象がなくしてはあり得ませんが、私たちは後ろを向いて机が見えなくなっても、机の形や色や机という概念を眼に浮かべることができですが、そのイメージが表象です。仏教術語では「想」といいます。意欲というのは術語で「行」で、意志といっても良いのですが、欲望も入りますので、わたしは意欲と訳すことにしています。識別作用、術語で「識」は、私たちの記憶や判断や推理などの考える働きであります。人の身心を含めて、存在するものすべては、この五要素の仮の集合であって、その他に自立的、不変化、永続的な実体は存在しない、というのが五蘊説の骨子です。蘊というのは集まり、グループのことです。

私たちはこの五蘊の最初の色を物質、ものとし、あとの四つ、すなわち感覚・表象・意欲・識別作用を精神的なもの、つまり心と考えて、五蘊全体を身心、か

です。

ブツダは彼を呼びつけ、叱りつけたあとで、こう教えます。たとえば視覚は眼ともの形・色とによって生じ、聴覚は耳と音声によって、嗅覚は鼻と香りによって、味覚は舌と味によって、触覚は皮膚と触れられるものによって、意識は識別作用と考えられるもの（法）とによって生じる。すべてはこのようなかかわりあい、縁起によって生じるのであって、意識という自己同一的な実体があつて輪廻の主体となるのではない、と教えます。このように、輪廻・転生というものにも、その主体となる実体を想定してはいけな、と教えました。

## 六

みなさまはチベットのダライ・ラマのことは良くご存じだと思えます。すべてのダライ・ラマは文殊菩薩の化身とされていますが、同時にその先代のダライ・ラマの生まれ変わり、輪廻であるともされています。この考え方は第五世のダライから始まったのですが、

らだと心とに分けることがあります。しかし物質と精神、からだと心とを別個なものから、実体と考えては具合が悪いのです。もともと五蘊説というのはわれわれの心身やすべてのものが五つのグループの集合あるいは関係であつて、その一つ一つが個別的な実体ではない、ということを表すものですから、物質と心を別個なものとして分けてしまつてはいけません。ものとは心は、いつも相互にかかわりあつて存在すると考えなければなりません。

## 五

中部経典（中阿含経 *Maññāsaṅgīyaka-sutta*）のなかに、ブツダの弟子で *Sāri* という比丘がいましたが、彼は「識別作用（識）が流転し、輪廻し、しかもそれは自己同一性を保つ」といい張つて、それがブツダの教えであると主張していました。この比丘は識別すなわち意識を、常に変化しない、自己同一を保っている実体と考え、われわれが生まれかわつてもその意識が輪廻の主体としての実体の役目をするのだ、と主張したわけ

第五世のダライは第四世ダライの、いまの第十四世ダライは第十三世ダライの生まれ変わりです。たとえば第四世のダライが亡くなりますと、近臣たちはすぐにその輪廻としての第五世を選ばねばなりません。どのように選ぶかといいますと、日本の巫女にあたるような神おろしの魔術師に聞いて、どの地方に第四世ダライが第五世として生まれたかを見当をつけて、そこへ行つて、第四世が死んでから四十九日以内に生れた子供を探します。日本と同じように、人が死ぬとその中有は四十九日以内に次の母親の胎内に入らねばならないとされているからです。そうして選んだ複数の子供のなかから、前代のダライが使用した身のまわりの物品を他のものと混ぜて、子供に選ばせます。前代のダライの使っていた筆なら筆などを正確に選んだ子供を生まれ変わりのダライと決めて、その後はその子に徹底的な教育を施して、次代のダライ・ラマを造り出すわけです。

こういう選び方をするのは、みなさまもご存じの『俱舍論』という書物が属していた説一切有部という有

名な小乗学派の輪廻説に拠っているからです。

ゴータマ・ブッダ自身が輪廻を説いたかどうかは諸説があつて十分に分かりませんが、すくなくとも後代には、輪廻ということが仏教のなかに定着して、重要な教義になつたことは事実です。ブッダは一般の在家の信者たちには、布施などの善い行為を行い、五戒・十善などの戒律を守つて、次の世には天界に生まれよ、と教えていますから、在家に対しては輪廻ということ必ずしも否定はしませんでした。同時に、出家の僧侶たちに対しては、輪廻は微妙であつて、理解できないところもある、といっていますから、必ずしも輪廻を肯定したわけでもなかつたようです。

仏教の輪廻説には二種類あつて、はやくは、説一切有部などの説く中有を中心とした輪廻説です。これは、われわれが死んだときに、この世での死と次の世での入胎までを媒介する中有という存在を主張しました。經典には衆生がその母親の胎内に宿るためには、三つの条件が必要だ、といっています。(1) 父母が性交すること、(2) 母に月経が(あり父に性的能力が)あるこ

と、(3) ガンダルバが性交の際に居合わせること、の

三つであります。ガンダルバとは神々の一種で中有の別称です。この三条件がそろつて初めて妊娠が始まるわけです。中有は神通力をもつていて、自分の父母になる者たちの性交の機会を見つけると、一瞬のうちにどんな遠方にも飛んで行つて、母胎に潜入します。中有は男ならば母に、女ならば父に執着して、父母の性交を自分のこととして行います。ただ、その際に、現代でいえば、クローン技術にあたる操作をして、父あるいは母一方のみの遺伝子からコピーの子供を造ります。前世の父なら父の行為に報いて次の世に生れる子供となるのですから、母親といういわば他人の業がまじつては困るからです。この点については八世紀のダルモッタラという学者が、たとえば同じ父母から生まれた二人の兄弟の、一方が知的にきわめて優れ、他方は知的能力はないが、運動に優れている、というようなことは良く経験されるが、それは輪廻とは全く関係がないことだ、といっています。

もう一つの輪廻説は、自己同一的な意識ではなくて、

瞬間的に滅しては生じて継続する意識の流れ(心相続)が、質料因となり輪廻の主体となり、肉体的な要素が補助因となつて、輪廻が成立するというものです。七世紀のダルマキールテイ(法称)がこの説の中心的人物です。たとえば、種子から茎が生じ、枝や葉や実が生じるように、質量因は変化しながら相続し、最後に実から種子が生じて次の世の胎児と成る、肉体的要素はたとえば水や太陽の光やあるいは農夫の力のような補助因として必要だが、それはあくまで補助的なもので、輪廻の中核は心の流れであるといっています。

しかしクローンのようなコピーを造るのが輪廻であれば、池田名誉会長がいうように、多様性と進化が失われてしまいますし、また心相続が輪廻の主体となるならば、肉体が死んだのちに意識の流れだけが存続するということも、現代人には信じがたいことです。結局、輪廻説は一種の神話であつて、現代ではあらたな解釈が必要です。

## 七

西谷啓治博士はマルティン・ハイデッガー(Martin Heidegger, 1889-1976) の実存哲学の立場を前提として仏教の六道輪廻の説を解釈しています。かなり難解なものです。ここには、西谷博士の冒頭の文を掲げ、それを私なりに解説してみようと思います。もつとも、ハイデッガーの哲学に深入りすることは、私には不可能なことがらなので、仏教の教義とのかわりにおいての解説にとどめます。(『宗教とは何か』一九六二)

「生死」と訳される言葉(Samsara)はまた輪廻とも訳される。人間を含めたあらゆる生けるもの(いわゆる衆生)の生存ないしは存在形相に固有な存在場が、六つに分けられ、衆生がその「六道」(天上、人間、修羅、餓鬼、畜生、地獄)の間を生まれかわり死にかわりして、車輪の果てしなく廻るように転化するという、そのあり方が、生死である。すなわちそれは、衆生に現れている世界—内—存在を意味する。しかも仏教においては、かかる生死としての世界—内—存

在は鋭く実存的に捉えられた。例えばそこでは生死の苦海ともいわれる。一つの存在形相から他の存在形相への果てしない転化が生起する場、「六道」を包括する場としての世界は、底知れぬ海のごとくであり、そこに果てしなく輪転せしめられる存在の本質相が「苦」にほかならないからである。近代西洋のニヒリズムにおいても、虚無の深淵が実存的に自覚に上つて来た時には、その深淵へ差し懸けられた実存は、大いなる苦悩に貫かれたものとして自らを自覚せざるを得なかつた。しかし仏教は、苦の実存的自覚の元に、更に進んで「一切皆苦」を語り、苦のうちの一つの根本原理を認めた。苦が「苦諦」として四諦の一つと解されたことのうちには、

苦の実存的自覚から、一切皆苦という形で世界—内—存在の「実存論的解釈」（ハイデッガーの意味での）に進んだともいふべきところが認められないでもない。それはともかく、生死の苦海に浮沈するものという存在自覚には、底知れぬ虚

表象内容における先論理的な思惟の限界を正当に指示すると同時に、神話の核心をなす実存的なるもの、即ち世界—内—存在の実存的な直視やその直視のうちに開示される独自の『理』を、不当に看過する。知性はここでも風呂の湯と一緒に子供までも流してしまふ。知性の眼には、盥のなかの子供は映らない」といつています。

「世界—内—存在」というのはハイデッガーの言葉です。われわれの現存在がさまざまな人や物とかかわり合っている状態を表すものですが、この場合の世界とは「存在するもの」ではなくて、あくまですべての存在するものを含んでいる場所にすぎません。この「存在するもの」とのかかわり合いではなくて、「存在」自体とのかかわり合いを追求することに、実存哲学の形而上学のコアがあるのです。

西谷博士の輪廻あるいは生死の解釈には二つの特色があります。一つは、人間とは「死に至る存在」でありますが、死とは人間としての生存に尽きるだけのものではなくて、天人や動物などの異類としての生存も

無の、ないしは「無化」の、自覚が含まれている。その生死のうちでの転化は、我々自身の業から規定されつつ果てしない未来の業を規定するから、現在の意志活動（業）の本質には、限りない運命的な因果性がパースペクティブ（遠近法）となつている。運命的といつても、生死界のうちでの限りない輪廻という見地からすれば、根本的にはすべて自らの業による結果をみずから得ることであり、苦としての存在は、自業自得としてのみその真実相をあきらめ得べきものである。生死が輪廻的に見られたことのうちには、存在の深い実存的把握が潜んでいると解することが出来る。

西谷博士は、「輪廻」という観念は、そのうちに表象されている内容からいへば『神話的』である。その表象内容は科学以前の迷蒙として容易に批判され得る」ということを率直に認めておられます。その上で、「一般に神話的なるものに対する科学的な批判は、神話のすべてを含んだ、包括的な輪廻的生存として捉えていること。二つめは、人間の「生死のうちでの転化は、我々自身の業（身・口・意の三業、即ち意志による身心の所作）と諸煩惱とをもとにして生起し、しかも現存在は果てしない過去の業から規定されつつ果てしない未来の業を規定するから、現在の意志活動（業）の本質には限りない運命的な因果性がパースペクティブとなつている。……根本的にはすべて自らの業による結果を自ら得ることであり、苦としての存在は、自業自得としてのみその真実相をあきらめ得べきものである」ということです。この点では西谷博士は経量部的な通行因—等流果の因果関係を認めています（詳説は避ける）。

この西谷理論の二つの特色は、世界—内—存在がただちに「無の内の存在」であることを示しています。例えば通常、人々が死というものについて、何年か後に自分が死ねば自分に死ということもなくなると考えるのと等しい。死のそういう表象は……：自分の生存の当下に、生の本質とひとつに死の本質を体認する、ということとは全く別である。自分が死ねば、自分と共

に自分の死もなくなるという自己把握、および死の把握

捉からは、生死を超える道、生死を脱した場への通路というようなものは全く塞がれている」と博士はいつています。いわば、それは「無限なる有限性」の自覚ともいえるべきものです。生死を超える道、生死を脱した場とは、いうまでもなく涅槃を意味します。

西谷博士は一九四九年の著作『ニヒリズム』の中で、「人間が生をうけるや否や、直ぐ、彼は死ぬるに十分なだけ齢を取っている」というハイデッガーの言葉を引用しています。私はこの言葉を読んだ時に、驚愕するとともに、ブッダの「生まれるということの中に死ぬということがある。少壮ということの中に老いるということがある」(相応部経典)という言葉を思い出しました。

西谷博士はハイデッガーの実存哲学を前提にして、全く新しい輪廻解釈を示されました。実存哲学からの解釈ということはともかく、仏教は今日にあって新しい輪廻説解釈を提供しなければならないのです。

(かじやま ゆういち／京都大学名誉教授)

(本稿は、二〇〇二年十月十八日に行われた講演内容に加筆  
いただいたものです。)